

武元登々庵

武元登々庵^{とうとうあん}(1767 年～1818 年)は、武元花子(文人で歌人・詩人・書家)の長男。岡山藩の閑谷学校^{しずたにがっこう}で学び、その後、長崎に渡って蘭学をおさめた。

京都や大阪を中心に活動し、歴史家の頼山陽^{らいさんよう}、詩人の菅茶山^{かんちやざん}、画家の田能村竹田^{たのむらちくでん}、浦上春琴^{うらかみしゅんきん}らと親交を結んでいた。

文化 10 年(1813)に自撰の詩集「行庵詩草」^{ぎょうあん し そう}、同 14 年(1817)に古詩押韻の研究書「古詩韻範」^{こ し いんぼん}を刊行した。病弱な体を抱えながら諸国を遊歴し、書家・詩人として歴史に名を留めることが出来たのは、父母や弟君立の強い支えがあったからだと言われている。(川端紅葉著 2026・9.10)



岡山県備前市吉永美術館は登々庵の作品を主として所蔵している。

「武元登々庵肖像画」(岡山県備前市立吉永地域公民館提供)